

森信三の『日本文化論』（1）

山 田 修 平

Shuhei YAMADA : “The Theory of Japanese Culture”  
by Nobuzoh Mori (1)

鳥取短期大学研究紀要 第71号 抜刷

2015年 6月

## 森信三の『日本文化論』(1)

山 田 修 平

Shuhei YAMADA : "The Theory of Japanese Culture"

by Nobuzoh Mori (1)

グローバル化、IT化、世界は狭くなった。人、もの、金銭、そして情報が国境を越え、民族、人種を越え、世界中を駆け巡る。戦後70年、わが国は確かに物質的には豊かになった。評価できる面は多々ある。しかしどこか心に空虚さを感じ、このままでいいのかという自責の念が生ずる。自己のよって立つ場は何処か？わが国の向かうべき方向は？ここに、1966(昭和41)年、現在より約50年前の森信三の著『日本文化論』を紹介する。その上で『日本文化論』に基づきながら、今後のわが国の、そして自身のあり方を考えたい。

キーワード：森信三 日本文化論 原始流動性 島国性 モンスーン型風土 情緒性

### はじめに

森信三とその哲学・全一学については、先に論及した<sup>1)</sup>ので、ここでは森の略歴、主要著書と全一学の特徴と森の人となりをはじめに簡単に記す。

森は、1896(明治29)年、愛知県で裕福な家の子として生まれた。しかし家の没落によって2歳で養子に出されることから始まり幾多の困難に出会うが、一つひとつ乗り越え、広島高等師範学校で福島政雄、西晋一郎、京都大学で西田幾多郎に師事して学問を深める。他方、沢木興道、新井奥遂等在野の思想家との交流を通じて庶民的かつ実践的な求道のあり方に触れる。そうした中で二宮尊徳、中江藤樹、石田梅岩等江戸時代の思想家に魅かれていく。

職業的には天王寺師範学校、建国大学、神戸大学等で教員、教授として哲学、倫理、教育学等を講義する。晩年は兵庫県尼崎市の同和地区に居を構え、実践人の家を創設、学びたいすべての者に分け隔てなく学びの場を提供した<sup>2)</sup>。

森の著作は数多いが、一般的な分野で言えば、哲学、人生論、教育論、国家論等広範囲である。また

森自身の言葉を用いると、「自証」と「化他」の学問分野がある<sup>3)</sup>。「自証」は詰めれば哲学であり、「化他」は人間の生き方、実践に関しての啓発である。

「自証」の代表的な著作は、30歳代の『恩の形而上学』と69歳、70歳に刊行した哲学五部作の『即物的世界観』、『宗教的世界』、『歴史の形而上学』、『人倫的世界』、『日本文化論』、80歳になって書き上げた全一学五部作の『創造の形而上学』、『全一の人間学』、『全一的教育学』、『全一の世界』、『情念の形而上学』が挙げられる<sup>4)</sup>。

他方、「化他」の著作は数多いが、その代表作は44歳と76歳でそれぞれ著した『修身教授録』と『幻の講話』である<sup>5)</sup>。

森の学問の特徴は、「自証」と「化他」は決して別々のものではなく、「化他」の土台には「自証」の哲学があり、実践、生き方として統一されているところにある。心と身体、学問と実践、個人と社会、そして宇宙が一体化している。森の学問が全一学といわれる所以である。

森は70歳を過ぎてから、同和地区に居を構え、実践人の会を主宰して多くの人々と共に学び、交流を大切にした生き方をした。また講演行脚し、生涯

の講演回数は1万回を越えるといわれる。1992（平成4）年逝去，享年96歳。

## 1. 『日本文化論』の著述の背景

上記のように『日本文化論』<sup>6)</sup>は哲学五部作の最終編として、「日本文化に関する見解を，一種の体系的立場に立って展開した」<sup>7)</sup>，森70歳の著作である。森の学問の中心テーマは常に「一度しかない人生」を「人は」，「自分は」「どう生きるべきか」である。そのために人間存在を，神を，歴史を，国のありようを突き詰めている。

森が『日本文化論』を著した1966（昭和41）年はわが国にとって，また森の人生にとってどのような時期としてとらえるべきであろうか？1945（昭和20）年，敗戦という形で終戦を迎えたわが国は，物質的にも精神的にもどん底の状態から再出発をせざるをえなかった。朝鮮戦争の特需景気を経ながら，1960年代になると高度成長期を迎え，東海道新幹線の開通，アジアで初めての東京オリンピックの開催，世界が驚く経済発展をしつつ，国家としての自信を取りもどしつつある時代であった。そうした時代の中で，アカデミックな世界でも日本や日本文化についての研究が始まりだした。

森にとっては，民族精神の高揚の象徴ともいえる満州の建国大学在職中に敗戦を迎え，やっとの思いで帰国し，困窮と自省の時期を経て，神戸大学に職を得，教育と講演等で比較的安定した時期を過ごした。その後定年退職，思わぬ形で突然の長男の逝去を機に，同和地区で独居自炊をしつつ，精力的に学問の集大成として著作に取り組むと同時に，実践人の会等を通して様々な人々との交流を大切にしていた時期であった。

森は自らの学問の集大成と日々の実践を通して，改めて経済成長の中で自信を取り戻しつつある日本の進むべき方向を問い直し，自己の生き方を見直すため，その前提となる日本文化について著述をせざるを得なかったともいえる。

## 2. 『日本文化論』の意図と構造

### (1) 研究方法と特徴

日本文化の研究方法について，森は「具体的な資料を主として，これの解明が行なわれるのが常であるが」，自身は「日本文化に対する一種の哲学的考察を試みる」としている<sup>8)</sup>。ただ「哲学的考察」といっても，大別すれば2つの途がある。1つは，自らの哲学体系の型をもって，日本文化に対して，これを当てはめようとするものであり，今ひとつは自らの哲学体系を押さえて，日本文化に内在している構造論理の自証を試みる途であるとして，森自身は，後者の立場に立つとしている<sup>9)</sup>。従って，この書において「日本文化」は，「いわゆる侘び寂び的な狭義の美的文化」ではなく，「全民族生活の全的統一を意味する」として，「国初以来，われらの民族のあゆみを通して生きかつはたらいて，現在に及んでいる民族の根本的生命の自己実現」だと言及する。その上で，その「哲学的考察」とは，「その体系的実証の他ない」とする<sup>10)</sup>。

日本文化の特徴を，「自己に固有な教学体系を持たなかった為に，民族生命の未限定的な原始流動が，いつまでも止むことなく，それは現在もなおその枯渴をみるに至っていない点にある」。その上で本書の特徴は，「わが国の島国性の力説」にあると自らの立場をはじめに明らかにしている<sup>11)</sup>。

### (2) 本書の構造

森は，先ず「序論 立場・ひとつの試み」で，上記のような日本文化を民族生活の全一的統体とし，その「哲学的考察」という把握方法をより詳細に述べる。その上で，全体を次のような10章に構成<sup>12)</sup>し，日本文化論を展開する。

- 1章 文化の受容と根源的エネルギーの問題
- 2章 島国性の運命
- 3章 日本文化と国土及び風土
- 4章 心情的文化とその展開

- 5章 求心性と遠心性
- 6章 縦社会文化とその超克
- 7章 外来文化の受容と溶融
- 8章 美の生活的具現
- 9章 第一の開国と第二の開国
- 10章 日本文化の将来と民族の使命

こうした構成からも、森が日本文化を大きな視点をもって捉え、また同時に具体的事象・事柄に対して分析を行い、さらにその前提として中核となる部分を抑えていることが推察される。以下、各章の要点を紹介しよう。

### 3. 『日本文化論』の展開

#### (1) 文化の受容と根源的エネルギーの問題

まず森は、文化とは、民族生命の自覚的自己表現であり、その具体的実現の統体である。言葉を代えれば民族の生活様式の統体である。従って、当然歴史的存在であると規定した上で、具体的なわが国の文化形成過程について次のように記す。

われわれの祖先は、まず朝鮮民族に接することにより、最初の文化的自覚をもったといえるが、ついで巨大なる漢民族の文化と接触することによって、大きく進歩したのである。こうしてわが国の文化は、以来二千年の長きにわたって、主として儒・仏の文化の消化によって、民族の生活様式を形成してきたといってよい。その後、明治維新を迎えるのを境に、巨大な西洋文化に当面して驚愕、自来今日まで百年の歳月を、ほとんど全精魂を傾けて、その摂取に没頭してきた<sup>13)</sup>。その場合、わが国が漢文化やインド文化、あるいは西洋文化と大きく異なると、積極的な形態において、自らの文化的特色を持たなかったことが、他文化を受容し、消化させやすくした。これは、長短は別にして、日本文化の最大の特質であるとする<sup>14)</sup>。ただ注意を要するのは、日本民族の基盤に、「一種の強靱なエネルギーが内包されている」ことである。それは、現在では、わが国は世界でも稀な単一民族といわれるが、原初に遡ってみれば、

一方には朝鮮半島を經由して、この島国に渡ってきた民族と、東南アジアの諸地域から、暖流に乗って島伝いに移住してきた民族、および北方から移住してきたヨーロッパ系というべきアイヌ民族が混住した一種の複合民族が、この小さな島国で、いわば「るつぼ」として、永年にわたる「生の試練」を経つつ、ついに現在のような単一民族まで練り上げられ、鍛え上げられてきた。この民族の根底に流れている異民族の「血」の渾融化に根ざした民族の根源的エネルギーが、日本文化の核心部分である<sup>15)</sup>。このエネルギーは、従来より、祖先が「神ながら」と表現し、把握したものである。それは民族的生命の大流のままにということであると<sup>16)</sup>民族の有史以前の無窮に淵源する他文化受容の根源的エネルギー・神ながらの基因とその特徴について述べる。

#### (2) 島国性の運命

「民族の根源的エネルギーを基底に、儒・仏、さらに西洋文化を受け入れ、融合し、日本文化の特質を形成してきた根本制約は、わが国の島国性にある。この島国性という一点を押さえれば、日本文化の一切の問題は明らかにできる」と森は言い切る<sup>17)</sup>。しかし、森がこの『日本文化論』を著した1966(昭41)年当時までに、島国性を明確に指摘した日本の研究者は見当たらず、世界的にもA.J.トインビーがわが国に来遊した折、「歴史の教訓」の講演で述べたに過ぎないという<sup>18)</sup>。

日本文化は時として凹型文化だと称せられる。その意図するところは、独自の文化体系を持たず、他文化を受容し形成されてきた文化という点である。ただ注意を要するのは、日本文化は単に受動的凹型ではなく、能動的凹型文化であることである。言葉を代えれば、他文化を受け入れるが、そのままの文化を受け継ぐのではなく、日本化していくのである。だからこそ、幾つもの文化が重層化あるいは共存できるのである。そしてそれを可能にしたのは島国性にあるという。なぜならば、仮に島国でなければ、他文化をまるきり受け入れてしまうか、自国の文化

に強固に拘る以外生存の途はない。他文化に支配された例として、朝鮮半島が挙げられるし、自国文化に拘り歴史を停滞した例に、インドや中国が挙げられるとする。

ところで森は、島国といっても、島国としてのわが国の地理上の位置、風土が他文化受け入れと独自性を形成する要因となる<sup>19)</sup>としている。具体的には1) わが国の国土の位置が、極寒のために萎縮するのではなく、また防寒のために力を消耗するほどではなく、2) さりとて熱帯の地で、食物が天然に用意されていて、そこには働く必要がないというようなこともなく、3) さらにこの比較的矮小な国土の上に、巨大数に上る人間が生きねばならないために、生活のために常に人々は努力する必要がある<sup>20)</sup>。加えるならば、今日のような航空等の交通手段が発達、さらに情報が一瞬のうちに世界を駆け巡る以前の時代において、わが国は他文化を受け入れるには程よく、また大国にとっては文化的支配、侵略をするのには遠い距離にある島国であった。続けてこうした条件のそろった中で、4) 精神的には、仏教及び儒教の教説によって、相当高度の思想が民衆化され、5) 文字についても、単に象形文字としての漢文字だけではなく、音標文字としてのカナ文字も創生し、そのために「テニヲハ」の使用によって、漢字よりも遥かに合理的な思想の表現を可能にした等が考えられると<sup>21)</sup>述べ、森は文化と国土、風土の関係についてさらに論をすすめる。

### (3) 日本文化と国土及び風土

国土の位置、また大きさの日本文化に与えた影響について、森は「一種神秘ともいふべき不思議さを感じる」<sup>22)</sup>とした上で、先ず海から3つの利点を得てきたとする。1つは海から食糧資源を得ている。魚介類から良質な動物性たんぱく質を得てきた。2つは安定した海路である。沿岸地域は人、ものの交流が比較的安全に行われ、沿岸地域から産業、文化が発達した。その代表例が瀬戸内海沿岸地帯である。そして3つ目として大陸からの適当な位置と関連し

て、アジア大陸からの距離、わが国が大陸文化を学ぶ上での朝鮮半島の橋梁的役割、さらに半島との間にある壱岐対馬の2つの島の意味を、歴史を遡り、遣唐使派遣、元寇、多数の半島技術者たちの渡来等を例に挙げ、説明する<sup>23)</sup>。

続いて、風土的観点より日本文化の特質を考察する。わが国は、南西諸島に始まり、九州・四国・本州及び北海道、そして千島までに達しているが、南方においては亜熱帯的地域、北方は寒帯地域に接し、周囲を海に取り囲まれている。そして全体的にみれば、和辻哲郎<sup>24)</sup>のいう高温多湿の「モンスーン地帯」である。モンスーン地帯は、夏季は高温、多雨、多湿であるため、稲作に適しているとして、牧畜、畑作中心の西欧諸国と水田農業中心のわが国の文化に及ぼした影響の相違について触れる。西欧の場合、畑作業は蓄力で行いやすく、比較的機械化しやすい作業である。これが自然科学を開発し、導入できた要因である。さらに機械産業は、土地を土台とする封建体制を崩壊させる要因ともなった。また牛馬等も労力的手段、食の対象とみられ、人間中心の考え方（ヒューマニズム）が根付く要因ともなった。これに対して、水田はその性格上、西洋の畑作のように蓄力や機械力を利用することは容易ではない。いつまでも人力中心であり、機械産業の発達は遅れ、封建体制は長く続いた。また牛馬に対しても、単なる労力的手段とみず、人間の仲間としてとらえている。これは生物に限らず、海、山、河川等に対しても、西欧とは異なり、単なる自然ではなく、そこに精神性を求めている。「国土の清浄さ」そうした感覚を人々に与えたのかもしれない。「山に威霊を感じる」という言葉がなによりこれを示しているとして、風土とわが国の文化との関連について述べる<sup>25)</sup>。

### (4) 心情的文化とその展開

自然科学を生み出した西洋文化の特質を、かりに合理的とすれば、日本文化の特質は、その情緒性にある。それではなぜ日本文化は、心情的かについて、森は日本の「国土や風土が調和的だからだ」という。

続けて「もともと美は生命の調和において成立するものであり、従って情緒的とは、生命の未分的統一が統一を崩されないままに、保たれている状態」<sup>26)</sup>とした上で、改めて「わが国の国土の多くが、寒帯地方のように厳しくなければ、また熱帯地方のように苛烈な暑さではなく、その大部分が適度な温帯地方になっている上に、四季の移り変わりは非常に規則的であり、しかもその季節の変化の上にも、微妙な調和があるためだ」と記す<sup>27)</sup>。また、情緒的だということは、必ずしもそこに知性的ないしは意志的なものがないという意味ではない。なぜなら情緒的なものには内に知性と意志とを内包し、それが露出している点が少ないのだという。さらに、ウラル・アルタイ系の言語が流入していることも日本の文化が情緒的である重大な一因子である。なぜなら、ヨーロッパ、あるいは中国系の言語は、主語の次にすぐに述語がくる。これは、主語は直ちに、己の意志決定を示す述語を要求しているが、そこには知的論理的な性格と共に、さらに意志決定的性格を有する場合が少なくない。これに対してウラル・アルタイ系の言語は、述語的規制は文章の最後に置かれる。最終決定をなすまでに、人々はその途中で出会う種々な言葉によって、あらかじめそれと察知し得るのである。いわば関係論重視の言語であるとする<sup>28)</sup>。

上記の風土や気候の調和的な運行、また言語要因に加え、主体的には日本の民族の構成要素がアジア諸民族のうち、南方系と北方系が渾融して単一民族になったという、生理的血液的要因がその基底にあることも、生命の調和と統一を基調とした生活文化を形成したのだという<sup>29)</sup>。

以上のように森は、わが国の心情的文化の要因を明らかにするとともに、続けてその代表例として、「古事記」、「万葉集」、「源氏物語」、芭蕉、さらに「正法眼蔵」も挙げ、その基底にある心情的特質を明らかにする。

まず、「古事記」について、「その内容はわれら民族の歩みと共に、古く言い継ぎ語り継がれて来たものの一大集積」で、「その内容の上からは、必然に

民族の歴史ともいうべき一面を具するが」その「表現様式の上からは、多分に文学的であり、さらに詩的とさえいい得る」<sup>30)</sup>。さらに古事記の世界は大らかであり、まどかであって、民族の渾一性を、もっともよく表現している。また「万葉集」について、いわゆる専門歌人の歌は、極めて少数に過ぎず、その大部分は、天皇、さらに一般庶民の詠んだものということ、わが国民が心情的な民族だということのもっとも顕著な徴標といえる。

「源氏物語」については、歴史的には古き時代に成立したものでありながら、民族における最大の長編小説であり、その格調の高さは比較を絶している。しかもそれが女性の手になったに至っては、特に注目に値する。仏教の教説の生命の無常観的体験の消息を、創作という散文的表現で試みた最高の古典であり、そこに表現せられた「生」の深大なる否定的世界の消息は、端的に「物のあはれ」、「いのちのあはれ」である。さらに続けて、仏教的無常観を契機として、民族の根源的「生」の表現、即ちまた民族の心情の最深にしてかつ最高なる表現までに結晶せしめたのは、道元の「正法眼蔵」であるとする。そこには他にみられない、生命の表現的リズムがある。そしてこうした民族の根源的な生命の流れを継承したのに「芭蕉」がある。表現形態の易簡さ故に、見逃しがちであるが、芭蕉の至りえた生命の表現リズムの深さと、その寂寥感、先記の古典表現と比肩できる。そこには「生」の否定的契機が深大に作用している。同時に「古事記」はもとより、「源氏」も「正法眼蔵」も十分に触れなかった、儒教及び老荘的な世界があると森は高く評価する<sup>31)</sup>。

このように森は、日本文化の特質として、心情的側面が文字を介して表現されているものについて例を示し解説するが、それは民族の心情そのものは、直接把握し難いから、文字に内包している意識に触れる他ないからであるとする。

最後に民族生命の根源に根ざす心情的なものの発露には、事行と芸術の領域があり、上述は、主に芸術についてのことである。他方の事行の領域とは、

心情の表現としての行為であるとした上で、将来的な見通しを述べるとすれば、人間自体が機械化せられつつある時、美わしき心情とその行為の実現ほど、今後人類に希求せられるものはないと、わが国が心情の深さと清らかさを、文化の根本特質としていることに謝念を示す<sup>32)</sup>。

### (5) 求心性と遠心性

民族の根底に作用している人間の心情は、周囲の種々の条件と結びついたり、吸引したり、あるいは排斥することを通じ、個人や民族の根本的原型となる。この民族の根源的生命の動きは、結局は求心性と遠心性という、二種の正逆の方向をとるが<sup>33)</sup>、これは物と人という現実界の二大領域の全面にわたって行なわれている動的真理の二面ともいえると、森は求心性と遠心性の視点から、わが国の文化の特質を分析する。

わが民族の場合、求心性の傾向が著しく、遠心性の力は比較的弱い。その根本要因はわが国の島国性に由来する。その端的に具現化されたものが皇室の存在である。皇室は、民族における中心帰向的心性の所産であると指摘し、歴史を振り返り、「かの大和政権がその実権を確立するまでは」、「民族におけるその中心的希求への動きは止み難きもの」があったが、大和政権の実権が確立、「中心帰一の力の充実に達するや」「一転して島国円環を切って」、「三韓征伐となったが」、「かの地における支配権の永続性を期しがたかった」のは、結局は「わが国自身の島国性のゆえ」と説明する。さらにその後の歴史を追い、大和政権の実質支配権が、皇室より貴族支配、さらに頼朝、北条氏、足利氏を経て徳川幕府に落ち着くまでの武士支配を概観するとき、国の実質上の中心と名目上の中心とに幾度もズレを生じたが、その結果、民族の統一的中心に関して、いわば「虚中心」と「実中心」ともいうべき、楕円の2中心のごとき現象を呈するに至った。それは京都と鎌倉、ないしは江戸というように、虚中心と実中心との間に、かなり距離的間隔が生じた。しかも両者の間に、何

れも一方が他方を完全に否定し消滅させることがなかったのは、権力の争奪を事とする冷徹な政治にあって、世界的にも稀有な現象であった。その根因は、結局わが国の皇室が、元来虚中心的意味をもつ処からくると説明する<sup>34)</sup>。

また求心性に比して遠心性の側面が弱い、民族の長い歴史の上で、しいて挙げれば上代の三韓の地の経略、遣唐使の派遣、倭寇の強掠、秀吉の朝鮮征伐等その是非は別として遠心的側面があった<sup>35)</sup>。しかしその終局に江戸時代の300年の鎖国があり、この対外的遮断によって、儒仏文化がわが国風に消化と溶融を可能にし、同時にそれらの教養は、武士階級のみならず、農・商・工等一般庶民階層に至るまで浸透した。そして明治維新を境としてひとたび国を開くや、従来のわが国の文化と根本的に質を異にする西洋文明を、比較的短期間に受容し消化した基盤的教養となり得た<sup>36)</sup>と求心性と遠心性の相互関係からもわが国の文化の特質を記す。

### (6) 縦型文化とその超克

続けて森は、同時に求心性の強い文化は、やがて縦型文化を生むと、その例として新聞、小説に象徴される縦組み印刷、掛け軸など絵画を示し説明する。ただこれらも自然科学分野の書物の印刷、また油絵等の一般化で縦、横の両文化が次第に平行して共存してきているとする<sup>37)</sup>。

より大きな問題は人間関係の問題であり、このことが「文化」の概念において、「中枢的根幹的な領域なのである」<sup>38)</sup>とする。その視点からわが国の社会組織、例えば大学・病院・官公庁、さらに企業等をみれば、擬似家族制が一般的であり、全員が縦の系列にはめ込まれているという。こうした縦割り型社会構造は、結局のところわが国の島国性に依拠する。なぜなら島国性は、必然一種の自閉的性格を持つことになり、その求心的文化となる。その中核に血統による世襲制である皇室制度がある<sup>39)</sup>。ただし天皇の場合、ある時期を除いて虚中心であったが故に、連綿と今日まで継続してき、それが国の安定に

寄与してきたとする。しかし他の社会組織においては、その弊害が至る所に現れつつあると指摘する。同時に、島国ゆえの縦型人間構造だが、島国は、他面からみれば、四方海であり、広く世界に広がりうる可能性があるとして、縦型社会の超克の必要性と方向性を示唆する<sup>40)</sup>。

### (7) 外来文化の特質の受容と溶解

森は、仏教、儒教、キリスト教という外来文化のわが国の受容のあり方とその既存の日本文化への溶け込み方を説明する。その原型が仏教の日本仏教化の過程だとする。仏教がはじめて正式にわが国に移入されたのは538年である。その折排仏の立場をとった物部氏を、進歩的な立場に立つ蘇我氏が凌駕する。常に新たな外来文物の摂取に、わが国は開かれていたわけである。はじめは寺院堂塔という外的有形物の模倣から始まったが、内的理解は、容易なことではなく、平安時代には、祈祷呪術の仏教が主となった。その後、鎌倉期に入って仏教的天才たちが、仏教教義に特有なその深遠な世界観を、当時の素枯な神道の信仰と一体として溶融したのである。実に移入当初から約700年を経ている。しかもその理解の仕方は明らかに「日本的」であり、日本仏教と称せられる所以だとする<sup>41)</sup>。

儒教の場合は、その移入は仏教より早いですが、多くは日常的人倫の道であって、仏教のように壮麗にして荘厳な建築文化を伴わず、仏教に圧せられて表面に立たなかった。あるとすれば、かの地に特有な革命観であったが、これは天皇制を一系相伝してきたわが民族的信念には受け入れられなかった。儒教は、徳川300年の時代に入って始めて、武士階級から一般庶民の中にも浸透する。但しこの場合も、革命観は除いてである<sup>42)</sup>と述べる。

他方森は、儒教以上に、仏教の消化以後、わが国がその摂取に取り組んだ外来文化はキリスト教だとする。その大きな要因は2つある。先ずその1つは、キリスト教は宗教であり、壮大な世界観をもつたものである。たしかに儒教も一種の世界観をもつが、儒

教的世界における超越的原理としての「天」は、必ずしも日常的人倫的世界を否定はしない。これに対して、キリスト教的世界観では、その超越の根拠としての「神」は現世的日常性の否定の上に成立する。そこがかえって人々の好奇心を引いた。今1つは、キリスト教が、その副産物として西洋の自然科学文明を移入したため、異常な情熱的旋風でキリスト教が迎えられたのだという。しかし、キリスト教に対する民衆の態度の余りに熱狂的であること、さらにキリスト教伝道者であるスペイン宣教師の背後に、領土的野心があるとオランダを通じて伝えられたこと等から、信長を経て秀吉で切支丹禁圧、そして家康に至り世界史上でも空前となる鎖国令となったと記す<sup>43)</sup>。

森はこのように、わが民族は外来の卓れた異質の文化に接すると、一時は狂熱的態度で吸収してきた。その要因は、自己に固有の文化を持たないこと、そして島国であるため常に断絶感があり、他文化に、空腹者、また断食中の者のように、飢えているためである。その基底に、時として天災を生き残り、人口比率の関係の中で生き残るために培われた民族生命の強韌性があるという。そして多くの場合、一時的に熱狂的であった状態は覚め、次第に沈静に向かう。とはいえ元へは戻らず、次第にこれを噛みしめつつ、自己に適したものとして、徐々に体解してきた<sup>44)</sup>とする。「日本的」仏教であり、「日本的」儒教、そして「日本的」キリスト教と言われる所以である。

### (8) 美の生活的具現

以上述べてきた点と異なった視点から日本文化を捉え、他民族の文化と比較して特色を述べるとすると、「美の生活的具現」、あるいは「美の日常生活化」である<sup>45)</sup>という。

その例として家々の垣根の朝顔の花、庭の鶏頭の葉を愛でながら、それに相応しい食器を用いて、食材を生かした和食を食し、窓辺の南部産の風鈴、鈴虫の声を楽しむという何気ない日々の生活<sup>46)</sup>を示す。そこには自然と溶け込み、日々を楽しむ情緒的



美的感性がある。芸術の分野にも、その大衆化が進んでいるとして、詩の分野における自由詩、また歴史的にも川柳、狂歌、そして俳句という庶民の文学を挙げる<sup>47)</sup>。

こうした文学の大衆化は、詩形の短小性のため可能であったが、この短小性もつまるところ「島国性に基因する」<sup>48)</sup>。また自然の美しさ、四季の移り変わりを詠んだ詩歌が多いところに表されるように、わが国の美しい風土がその根底にある<sup>49)</sup>と述べる。

### おわりに

以上、体系的哲学的視点からの森の日本文化論の要点を、できる限り忠実に論述してきた。その特徴を端的に示すとすれば、民族生命の原始流動性・未限定的受容性を基因とした外来文化の受容と溶解、モンスーン型風土の影響、心情的文化、求心性志向の文化、縦型文化、美の日常生活具現、そしてその基底に島国性があるとする点である。

この後、森は「9章 第一の開国と第二の開国」で、明治維新と太平洋戦争後の日本の改革、復興、発展の特徴を文化的視点から記し、最終「10章 日本文化の将来と民族の使命について」で、歴史的、巨視的立場から提言する。

次稿では、9章、10章を紹介した上で、森の日本文化論を踏まえ、50年前の森の提言をどのように捉えるのか、現在のそして将来の日本の文化のあり方について考察したい。

### 注

- 1) 森信三の略歴、学問体系、そして実践については、下記の連作の論稿で示した。  
山田修平「森信三の全一学と実践 (1)～(5)」、『鳥取短期大学研究紀要』第62号～第66号、2010年12月、2011年6月、12月、2012年6月、12月、及び「補論：森信三の全一学と実践」、『鳥取短期大学研究紀要』第67号、2013年6月。
- 2) 前掲「森信三の全一学と実践 (1)」, pp. 1-8 参照.
- 3) 前掲「森信三の全一学 (2)」, pp. 3-4.
- 4) 同上, p. 3.
- 5) 前掲「補論：森信三の全一学」, p. 1.
- 6) 森信三「日本文化論」, 『森信三全集第五巻』, 実践社, 昭和42年.
- 7) 同上, p. 289.
- 8) 同上, p. 290.
- 9) 同上, p. 290 参照.
- 10) 同上, p. 291 参照.
- 11) 同上, pp. 291-292 参照.
- 12) 同上, pp. 293-296 参照.
- 13) 同上, pp. 321-323 参照.
- 14) 同上, p. 325 参照.
- 15) 同上, pp. 325-327 参照.
- 16) 同上, p. 353 参照.
- 17) 同上, p. 345.
- 18) 同上, p. 346 参照.  
Toynbee, A. J. 1889-1975 イギリスの歴史家。  
独自の世界諸文明の興亡の一般法則を体系づけた。著書の1つに(松本重治編訳)『歴史の教訓』, 岩波書店, 1957があるが、その中で「日本の島国性」について記している。p. 48 参照.
- 19) 前掲「日本文化論」, p. 362 参照.
- 20) 同上, p. 337.
- 21) 同上, p. 337 参照.
- 22) 同上, p. 371.
- 23) 同上, pp. 372-375 参照.
- 24) 『風土一人間学的考察』, 岩波書店, 1935 (昭和10)年の著で和辻哲郎は、モンスーン、砂漠、牧場という風土の3類型をあげ、世界各地域の文化、社会を分析している。わが国はモンスーン地帯に属するとしている。森の風土論的論述は和辻の分析と重なり合うところが多い。
- 25) 前掲「日本文化論」, p. 390 参照.
- 26) 同上, p. 397.
- 27) 同上, p. 398 参照.
- 28) 同上, p. 398 参照.
- 29) 同上, p. 399 参照.

- 30) 同上, p. 400.
- 31) 同上, pp. 409-413 参照 .
- 32) 同上, pp. 418-419 参照 .
- 33) 同上, p. 421.
- 34) 同上, pp. 430-431 参照 .
- 35) 同上, pp. 439-440 参照 .
- 36) 同上, p. 444 参照 .
- 37) 同上, pp. 447-449 参照 .
- 38) 同上, p. 451.
- 39) 同上, pp. 460-462 参照 .
- 40) 同上, pp. 467-468 参照 .
- 41) 同上, pp. 478-480 参照 .
- 42) 同上, pp. 481-482 参照 .
- 43) 同上, pp. 480-481 参照 .
- 44) 同上, pp. 482-484 参照 .
- 45) 同上, p. 500.
- 46) 同上, pp. 501-505 参照 .
- 47) 同上, pp. 506-509 参照 .
- 48) 同上, p. 511.
- 49) 同上, pp. 511-513 参照 .